【優秀賞】

『銀河鉄道の夜』アダプテーション研究

中村 真子
岐阜大学地域科学部 1 年

要旨

本レポートは，宮沢賢治著『銀河鉄道の夜』をベースとしたアダプテーション作品について探究することで，原作の思想やテーマについて探ろうとしたものである。研究の過程においては，様々なジャンルのアダプテーション作品を読解，視聴し，最終的に 1985 年公開の映画『銀河鉄道の夜』に焦点をあて，映画の様々な要素から，原作がどう解釈され，作られたかを分析することで，改めて宮沢賢治の思想に迫ろうとした。原作の持つ神秘的かつ抽象的な世界観は一見難解であるが，別の芸術作品を通して原作を見直すことで，結果的に宮沢作品に対する新たな考え方を導くことができた。

キーワード：宮沢賢治，銀河鉄道の夜，アダプテーション，映画，漫画

序論

本論文は，宮沢賢治著『銀河鉄道の夜』のアダプテーション（翻案）作品を研究対象とし，それらの作品の制作者の原作（宮沢賢治の小説『銀河鉄道の夜』）解釈や制作過程を探ることを通して，宮沢賢治本人の狙いや意図について探ろうとしたものである。

『銀河鉄道の夜』は現代でも宮沢の作品群でも代表作としてよく取り上げられる。しかしながら，緻密に描写された銀河で繰り広げられるストーリーには，宮沢の科学的知識が多彩に盛り込まれていると同時に，作品そのもののメッセージや意図はなかなかつかみどころがなく，様々な研究や解釈がなされてきた。今回，漫画やアニメなどのアダプテーション作品をとおして賢治以外の人物の『銀河鉄道の夜』に触れ，それらの作品について考察することが，かえって宮沢の原作について理解を深めることにつながると考えた。

この論文は，主にますむら・ひろし作の漫画『銀河鉄道の夜』（1983 年），及びこの漫画を原案とした杉井ギサブロー監督のアニメ映画『銀河鉄道の夜』（1985 年）について論じていく。その他の作品は第一章で述べ，紹介までにとどめることとする。

アダプテーションという用語はブリタニカ国際大百科事典によると「映画用語。原作となる小説や戯曲を映画的に脚色ないしは潤色すること」と定義されている。さらに今回の研究

のテーマ，問題提起において，東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻で開講されている「批評理論文献講読Ⅱ（7）(アダプテーション研究（文学と映像）の諸理論)」（秦邦生　2015）のシラバスの内容，及び『映画原作派のためのアダプテーション入門』（波戸岡景太　2017）を参考にした。

しかしながら，今日『銀河鉄道の夜』から派生したと思われる作品は非常に多岐にわたるため，この論文では，アダプテーションの条件を，原作と①登場人物並びに②ストーリーが一致している作品に限定する。

第一章　『銀河鉄道の夜』アダプテーション作品

先ほど述べたように，今日の『銀河鉄道の夜』アダプテーション作品は非常に多い。参考までに通販サイト Amazon.jp ですべてのカテゴリーを対象とし“銀河鉄道の夜”と検索すると 596 件ヒットする（2018 年 1 月 27 日最終アクセス）。もちろん，この中には複数の出版社から発行された原作を収録した文庫本や単行本，原作の解説や研究を著した書籍も含まれており，アダプテーション作品の具体的な数を表すことにはならないが，そういった商品の表紙に目を向けるだけでも，銀河の描き方，登場人物の容姿，表紙そのものが表現する原作への製作者の様々なイメージが読み取れる。そもそも原作は小説，つまり文字を通してでしか情報を提供していない。後述するように，ますむらひろしによると宮沢は見えない世界を緻密に，矛盾の無いようにストーリーを構築していった。アダプテーション作品は，それを音声化，映像化することで，各製作者が原作への理解やアプローチに挑戦したもの，ともいえる。今回の研究にあたって鑑賞したアダプテーション作品を以下に掲載する。

【漫画】

「銀河鉄道の夜—最終形・初期形〈ブルカニロ博士篇〉」（ますむらひろし　偕成社　2001 年）［「最終形」は 1983 年，「初期形」は 1985 年発表］

「銀河鉄道の夜（まんがで読破)」（バラエティ・アートワークス作画　イースト・プレス 2007 年）

【映画】

アニメ　銀河鉄道の夜（ますむらひろし原案　杉井ギサブロー監督　1985 年）

【テレビドラマ】

80 年後の KENJI～宮沢賢治 映像童話集～「銀河鉄道の夜」（NHK 制作　2013 年 3 月 6 日放送）

【絵本】

「銀河鉄道の夜」宮沢賢治童話集⑬　（画　東逸子　公文出版　1993 年）

「銀河鉄道の夜」（画　小林敏也　パロル舎　1984 年）

【翻訳作品】

「英語で読む銀河鉄道の夜」（ロジャー・バルパース著，ちくま文庫　1996 年）

特に宮沢自身が童話作家という肩書をもつためか，絵本一つとっても同じジャンルでひとくくりにしてよいのか悩むほどに多様な作品が存在する。つまり，児童書として子供が読むことを前提に制作されたものから，アーティストが自身の作風を『銀河鉄道の夜』に落とし込み，その世界観に挑戦しようという試みが感じられるような，児童書という目的をそこまで強く持たない作品まで見受けられたのである。

ますむら・ひろしは著作『イーハトーブ乱入記』で，原作内でジョバンニとカムパネルラの見た目についての描写が一切書かれていないことを指摘している。しかし，ますむらの指摘した二人だけでなく，全体を通して登場人物の見た目についてはほとんど書かれていない。したがって，絵や実写を含む作品は彼らをどう描くかについて顕著な違いが見受けられる。特に冒頭の授業の場面に登場する先生は各作品で男性として描くか，女性として描くか，かっきりと分かれている。例えば NHK のテレビドラマでは，先生は若い華奢な女性だったが，対照的にますむらの漫画やアニメ版はよく生やしたひげをこさえたずんぐりとした体格の中年男性であるという具合だ。また，東逸子の絵本作品では主人公の 2 人はヨーロッパ系，白人系の特徴を表すような外見であるのに対し，小林敏也は大正から昭和期にかけての日本の子供の特徴をとらえたような人物像で描いている。角川文庫は『銀河鉄道の夜』の巻末解説で，ジョバンニやカムパネルラはキリスト教に登場する人物から派生したイタリア系の名前であると述べている。ただ，難破船で命を落とした姉，弟の 2 人には日本人を思わせるような名前が付けられている点も指摘したい。

また，これらの人物描写において，ますむらが自身の漫画で「猫」を採用した経緯及びその意図についてはより深く後述する。

第二章　『銀河鉄道の夜』と漫画家ますむら・ひろし

この章では，漫画家ますむら・ひろしの宮沢賢治，及び『銀河鉄道の夜』に対する解釈や，彼の漫画化作品について言及していく。ますむら・ひろしは 1952 年山形県出身の漫画家である。宮沢の作品を多数漫画化しており，その中に『銀河鉄道の夜』も存在する。著書『イーハトーブ乱入記』で彼は，宮沢賢治作品との出会い，作品解釈の過程，作品の考察について非常に詳しく自身の体験を述べている。この著書から言えるのは，まず，ますむらが原作そのものだけでなく，非常に細かな研究や学者との交流を通してこだわりを持って漫画を完成させたという点だ。宮沢の他の作品についてももちろん言及しているが，本の内容全体をとおして『銀河鉄道の夜』の記述に大変重きを置いているのがわかる。

何より，ますむらの漫画化作品がほかの漫画化作品，アダプテーション作品全体と顕著に異なる点は，やはり彼が登場人物を猫で描いた点である。ますむらは猫を描写するにあたって非常に緻密な考察を著書全体にわたって繰り広げている。その中でも特に『イーハトーブ

乱入記』の第一章では，彼が，水俣病が問題になった際に実験動物として人間に苦しめられる猫を見たという話から始まり，宮沢賢治の作品に登場する猫を挙げて，彼が猫を『銀河鉄道の夜』に採用する過程を示した。

ますむらによると，宮沢賢治は猫に対する嫌悪感を表現した短編『猫』を書いている。当時宮沢賢治の作品に強い好感を抱いていたのと同時に，猫を登場人物にした漫画で評価されていた彼は淋しさを感じたという（p.88）。また，宮沢のこの短編を知る者からも宮沢賢治の作品を猫で描くのには反発があったそうだ。しかし彼の考察を追っていくと，その研究の過程でますむらの推測と宮沢が作品中で登場させている猫に関する内容とが見事に合致している。逆に言えば，宮沢が筋の通った，理屈のある精密な作品作りをしたことになる。宮沢は，猫に非常にこだわりを持って作品に登場させていた。彼はこの点で宮沢の「猫嫌い説」を払拭したと述べている。

さらに，彼は『銀河鉄道の夜』を猫で描いたのは，第一章でもふれたように，登場人物の外見描写がほぼ皆無であったからとも主張している。「ジョバンニの顔は，どんな作家が描いたところで，読者のイメージとは違う。しかも，100 人の読者には 100 個のジョバンニの顔がある」（p.76）。ますむらは，第一章で『銀河鉄道の夜』の難解さの原因に宮沢賢治の意図的な説明不足があると述べており（p.50），その代表がカムパネルラの死がぼんやりとしか描かれていないことだとしているが（p.50），この説明不足は人物描写についても同じことが言えるのではないだろうか。

複数の作品を鑑賞する中で，登場人物が人間だった場合と，ますむらの猫バージョンとを比較すると，ますむらの作品のほうが銀河鉄道という幻想にジョバンニやカンパネルラが溶け込んでいるように思われた。ますむらの猫は，誰がどの時代に見ても，受け取る印象はほぼ変わらないだろう。というのは，反対に，人間で描写する際に伴う事柄に，時代や人種といったある一定のグループの特定化を避けることができないというのがある。銀河鉄道の世界はそこに実際の歴史的事柄を付与していたとしても，時代や国を感じることがない。その空間がいつの時代でどこの国なのか，という感覚からかけ離れた世界である。この点で，猫，非人間的存在は現実世界のどのグループをも特定しない存在として描きやすかったのだろう。

アニメ版『銀河鉄道の夜』を監督した杉井ギサブローも，ますむらのアイデアに同意して，猫を登場人物として描いている。しかしながら，そのますむらの漫画版を参考にしたとはいえ，いくつかの相違点もみられた。次章では，漫画版との比較もしながら，アニメ版『銀河鉄道の夜』について言及していく。

第三章　アニメ版『銀河鉄道の夜』について

この章では，1985 年のアニメ映画『銀河鉄道の夜』について述べていく。作品情報は以下の通り（映画情報サイト「映画.com」より）。

【スタッフ】監督：杉井ギザブロー／原作：宮沢賢治／原案：ますむらひろし／脚本：別役実／音楽：細野晴臣
【キャスト（声の出演）】田中真弓（ジョバンニ）／坂本千夏（カムパネルラ）他
【作品データ】製作年：1985 年／製作国：日本／配給：日本ヘラルド映画／時間：107 分

監督を務めた杉井ギサブローは，著書『アニメと生命と放浪と「アトム」「タッチ」「銀河鉄道の夜」』に本映画を制作した経緯について記している。彼はこの 1985 年公開の『銀河鉄道の夜』の制作を引き受けることになる前にも一度『銀河鉄道の夜』映画化の依頼をされている。しかし彼はその時点では引き受けなかった。本書で述べられたその理由は，まさにますむらが漫画化の際に突き当たった壁と同じものであった。杉井の著書から引用する。

> 抽象的な存在として文章で書かれているキャラクターである以上，どんな顔を描いても，原作とは異なってしまう。具体的な顔を与えてはいけないのが『銀河鉄道の夜』のジョバンニなのだ。

しかし，二度目の依頼の際に持ち寄られたますむら・ひろしの漫画をみて，映画化の可能性を見出す。そして制作に取り掛かった，というわけである。

現在も『銀河鉄道の夜』について精力的な研究が続けられているように，この童話はさまざまな解釈を要する。杉井が映画化する際に“変更”したと思われる箇所について漫画版，そして原作との比較から考察する。

まず登場人物について述べれば，漫画版に対して，ジョバンニやカムパネルラの感情の起伏が表情にあまり表れてこないように作られている。ジョバンニが最後カムパネルラの名前を叫ぶシーンはアニメ版オリジナルだが，この場面までその小さくつぐんだ口はしゃべるときでも控えめに動き，大きく口を開けて笑ったり大げさに悲しんだりすることがない。そして「死」のにおいをまとった，全体的に暗い画面の中でその瞳は光っているように強調され，視聴者の視点がその目に集められるようだ。テレビ番組『アニメ夜話』でこのアニメ版『銀河鉄道の夜』における猫の効果について討議されていた際，画家 MAYA　MAXX は「動物で何にするといったときに，猫以外考えられない」と発言した。その理由として猫という動物に知性を感じられるからだという。ジョバンニについていえば，原作を見ると，かっこ書きで記されている数あるジョバンニのセリフの中でもそのすべてが発言されたものでないことが読み取れる。それはジョバンニの心の中を書いているものなのだが，何度もその手法が出てくる。アニメ版のジョバンニも銀河鉄道の中で出会う人々の顔をうかがいながら，いつも何か考えているようだ。しかしそれを口に出すのはほんの少しなのである。銀河鉄道のシーンだけでなく，銀河鉄道に乗る前のシーンでも，動作が大胆でニヤッとした表情が特徴のザネリをはじめとした，若いパワーのあふれるクラスメートとは違い，いつも何

か考えているような物静かな風貌は，逆に目立って見える。さらにそのつぐんだ口が何か言いたそうで，観る者を引き付けているのかもしれない。先ほど述べたように，最後カムパネルラが行ってしまい一人になってカムパネルラの名前を叫ぶシーンはそれらを踏まえればまさに解放という言葉がぴったりだ。『アニメ夜話』でこのシーンについて討議された時もこの言葉が出てきたが，作画を担当した江口摩使介はそれに加え“生まれ変わる”というワードを用いて，現実世界に戻るジョバンニが銀河鉄道に乗る前とは違う意識を持っていることを指摘している。

アニメ版は登場人物をすべて猫で描くことはしなかった。タイタニック号沈没により命を落とし，銀河鉄道に乗り込んだ家庭教師とかおるという女の子そしてその弟は，人間の姿で表現した。ここはキャラクター造形においての，ますむら・ひろしの漫画との一番明確な違いだろう。他の登場人物がすべて猫で統一されている中，この三人だけが人間なのは浮き出た何かを感じる。このことについて，江口摩使介は杉井から「タイタニックの事件が人間の悲劇である」ということをよく聞いていたと話している（『アニメ夜話』にて）。「幻想第四次」（原作より）といわれる非現実的な空間の中に実際に起きた人間の出来事を落とし込むことで，観客が「死」をひしひしと，現実的に感じるような仕掛けになっている。その効果に人間として描くことが一役買っているのだ。

ここからは，アニメ版ならではの「音」に注目したい。アニメ映画というとまず子供向けの作品というイメージが浮かぶ。しかしながら，このアニメ映画は子供向け作品というには，音の効果がかなり不気味だ。何かが近づいてくるような，単調な足音のように刻むリズムの上に，これまた電子音を用いて，どの音色とも言えないような，浮遊する音楽を作り出している。第三章で述べたように，この物語は舞台設定において国籍や文化といったグループを特定するのに象徴的な手がかりが少なく，抽象的に描かれている。音楽もそれに同調し，銀河鉄道という場面に適していると言える。ただ，一つひとつの場面と音楽という点で言えば，かなり特殊な使われ方をしている。映画やドラマの中でその場面の雰囲気や登場人物の感情を表すのに音楽は大きな効果を持っている。多くの作品では，だいたい悲しみを表現するのに短調でなだらかなメロディー，楽しさを表現するのに明るく快活な音楽を用いるなど，ある程度決められているようなものだ。しかしその意識で見ると，この作品ではいくつかの場面で映像と音楽のミスマッチを感じる。

中でも特筆すべきが，ジョバンニとカムパネルラの別れのシーンだ。心の支えだったカムパネルラが自分の遠くに行ってしまうことの焦りと不安，悲しみでジョバンニが必死に彼を追いかけ，閉まってしまったドアを開けてくれとドアの向こうのカムパネルラに訴えかける。そんなシーンで流れてくるのは，長調で軽く，マンドリンの明るい音色とパンやフルートを彷彿とさせる笛楽器の快活な音楽なのである。場面の雰囲気もそうだが，セリフの内容，感情の込め方とも一線を科すような印象を受ける。NHK のテレビ番組『SWITCH インタビュー　達人達』でバイオリニスト五嶋龍と俳優岡田准一が対談した際，岡田が出演した映画の VTR が流れた。そのスピード感ある迫力のアクションシーンを二人で観ていたが，

五嶋がそのシーンのバックに流れているオペラ（プッチーニ作曲の『トゥーランドット』より「誰も寝てはならぬ」）が優雅に流れているのに対し「このギャップが良いんですよね」と話していた。一番観客の心に残したいシーンであえて他の場面と逆のことをする，通例に逆らってみるというのは際立たせるのに効果的なようだ。

カムパネルラが行ってしまい，姿が見えなくなったあと，素早くその快活な音楽がフェードアウトし，一気に無音状態がつくられる。ジョバンニの珍しく張った声と音楽，カムパネルラのセリフというように音だらけだった場面から一気に急降下し，残るのは列車の中をとぼとぼと歩くジョバンニの足音だけになる。そしてジョバンニが「カムパネルラー！」と叫ぶのだ。非常に緩急の大きい場面といえる。観客の耳にこのジョバンニの心の開放が残るような仕掛けになっているのだ。ジョバンニの表情や淡々とした話し方はこの解放の準備となっているように考えられる。

杉井は列車の音を「幼児が胎内で母親の鼓動を聞いているような音」になるよう指示したという。(『アニメと生命と放浪と』p.37）どんなに静かなシーンでも銀河鉄道に乗っている間聞こえてくるこの音，は言われてみると確かに鼓動のようだが，同時に何かが迫ってくる恐怖感もあおっているのではないか。胎内で幼児が聞いているのだと考えると，それは先ほど述べたジョバンニの「生まれ変わり」や「解放」という解釈につながる。しかし，銀河鉄道が天上へ導く列車だということも踏まえれば，死が近づいているという暗示にも聴こえる。この点で生と死が紙一重になっているのは，宮沢賢治の生涯のテーマともいえる「自己犠牲」に沿っていると考えられる。

最終章　宮沢賢治自身による『銀河鉄道の夜』のアダプテーション

映画は，宮沢賢治の用いた小説という媒体に比べれば，いうまでもなく言葉以外の手法も駆使し，多角的に鑑賞する人に訴えかけることができるものである。しかし，杉井やますむらが指摘した原作の抽象性はそれらの手法，特に人物やもの，背景を絵に描くという点で逆に観客や読者との間に解釈のずれを生み出してしまう危険のある難題であったと言える。特に杉井やますむらの著書やその他『銀河鉄道の夜』を分析した論文や書籍を見ても，様々な方向に解釈することができ，また，抽象的描写がために言及する点が非常に多くこの作品に隠されていることがわかる。

宮沢賢治は同じ作品を何度も書き直すことが多く，ちくま文庫では最終的に宮沢賢治が採用しなかった原稿を異稿として掲載しているが，中でも『銀河鉄道の夜』は大胆かつ物語の筋や設定まで変更するような異稿が存在することでも有名である。宮沢が初期段階で作り出した，ジョバンニにカムパネルラとの旅の意義を最後に解説するブルカニロ博士は最終形には登場せず，ほとんどのアダプテーション作品もブルカニロ博士の登場しない『銀河鉄道の夜』をもとにしている。

また，宮沢賢治といえば熱心な法華経信者であったことが知られているが，『銀河鉄道の

夜』は十字架や神，などのモチーフからキリスト教をほうふつとさせ，仏教的要素があまり感じられない。

定方晟は「『銀河鉄道の夜』と法華経」でそのブルカニロ博士が仏教的性質を持っていると述べている。そしてますむらの漫画版で初期形にも最終形にもちりばめられた仏教的モチーフが，アニメ版制作の際にキリスト教モチーフが強調されたことでいくつかなくなり，世間的にも『銀河鉄道の夜』がキリスト教の話であるというイメージがついたと指摘した。天上へ行くという女の子向かってジョバンニが言う「そんな神様うその神様だい」というセリフが漫画版まで登場していたのにアニメ版で省かれたという顕著な相違点は，定方も仏教的視点から「のぞかれた最も大事な部分」と述べた。

定方の分析によれば，実は『銀河鉄道の夜』には仏教的，とくに法華経と結び付けられる点は多くあげられることがわかる。定方はアニメ版が世間にキリスト教的イメージを強く押し出したことを批判的に書いているが，このアニメ版が宮沢ではない人物の解釈によるアダプテーション作品であるとすれば，その仏教の象徴と考えられるブルカニロ博士を最終的に省いた宮沢自身もまた，改稿を行うことで，自分自身の作品のアダプテーションを生み出したと言えるのではないだろうか。特に端々のエピソードだけでなく，物語の設定や結末を変更するというのは，小説を映画化する際に見られるパターンとして存在する。

さらに，『銀河鉄道の夜』が「生まれ変わり」や「再生」の物語であるという点について，「実験記録から未決の物語へ：宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の改稿をめぐって」（閻慧　2014）では，さらに「新しい人間関係の再構成を迎える」話で，物語は完結していないと指摘されている。このことについていえば，くっきりとしたはじめと終わりのある物語というよりは，ジョバンニの人生の一部分を切りとったような，未来を意識させるような作りが見えてくるのではないだろうか。

序論で，アダプテーション作品が宮沢賢治への理解を深めることになると述べた。しかし，ますむらや杉井の解釈，そして彼らの作品作りを知ると，アダプテーションは単に鑑賞する側がより理解するための作品とは言えないようだ。『銀河鉄道の夜』は特に，アダプテーション作品によって，より言及する解釈を広げていくための，原作とは違うもう一つの作品と考えられる。『映画原作派のためのアダプテーション作品　フィッツジェラルドからピンチョンまで』（波戸岡景太　2017）では，原作や映画化ということについて様々な批評が飛び交うが，それらはどの立場であっても互いに小説や映画を意識していることを指摘している。先ほど宮沢自身がアダプテーションを行っていると述べたが，新たな解釈を加えたり，元にあった思想のキーとなるモチーフを省いたりするということで，宮沢は柔軟なアダプテーションを施したと言えるのではないだろうか。そして，その世界観の抽象性に忠実であったという点で，アニメ版『銀河鉄道の夜』はアダプテーション作品として成功していると言えるのだ。

【参考資料】

映画.com「映画『銀河鉄道の夜』」（http://eiga.com/movie/36019/　2018 年 1 月 27 日最終アクセス）。

NHK 製作（2007 放送）「BS アニメ夜話　銀河鉄道の夜」。

NHK 製作（2014 放送）「SWITCH インタビュー達人達（たち）SP　岡田准一×五嶋龍」。

閻慧（2014）「実験記録から未決の物語へ：宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の改稿をめぐって」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』14:55-70。

ますむら・ひろし（1998）『イーハトーブ乱入記－僕の宮沢賢治体験』筑摩書房。

ますむら・ひろし（2001）『ますむら版宮沢賢治童話集　銀河鉄道の夜　最終形・初期形［ブルカニロ博士篇］』偕成社。

定方晟（1995）「『銀河鉄道の夜』と法華経」『東海大学紀要 文学部』64: 1-23。

杉井ギサブロー（2012）『アニメと生命と放浪と　「アトム」「タッチ」「銀河鉄道の夜」を流れる表現の系譜』ワニブックス。

杉井ギサブロー監督（1985）『銀河鉄道の夜』日本ヘラルド映画。

波戸岡景太（2017）『映画原作派のためのアダプテーション入門　フィッツジェラルドからピンチョンまで』彩流社。

宮沢賢治（1985）『宮沢賢治全集 7 』筑摩書房。

宮沢賢治（1996）『銀河鉄道の夜』KADOKAWA。